

# 配慮することはプラス

株式会社ワールドバイオニア バリアフリー・アドバイザー 中園 秀喜

現在日本の高齢者は2,200万人、25年後には3,500万人に増加する。高齢者は年とともに体に不便を感じるようになるが、耳・目・足など、どこから悪くなるのか、それは神様以外わからない。ちなみに聴覚障害者は軽度の難聴者も含めると現在600万人、50年後には800万人以上に増えると言われている。しかし、大切なことはすべての人がありのままの姿で社会参加できるようにすることだと思う。これをバリアフリー・ユニバーサルデザイン化(以下、BF、UD化)と呼ぶ。BF、UD化を進めないと、人間の自立支援、社会参加が妨げられ、これは経済の発展を阻害することにもつながる。

政府はこの方針に基づき、法律、環境、設備などの整備を進め、2006年12月にはバリアフリー新法が成立した。同法は医療機関にも適用される。

バリアフリーと言えば、一般的には段差を解消したり、幅や高さをどれだけにするかといった物理的な解決方法がとられてきたが、これは聴覚障害者などには当てはまらない。火災報知機の鳴っている音が聞こえない、コミュニケーションが困難などは情報のバリアなのだ。これを解消することが情報バリアフリーであり、ここでは医療機関と情報バリアフリーの関係について述べたい。

私は聴覚障害者で、音は聞こえるが言葉の弁別はできない。昨年1月、血尿が出たので近くの総合病院で診察を受けると、「前立腺ガンの疑いがある」と告げられた。その後、

PSA検査などいろいろな検査を受けたが、検査の前に「私は耳が聞こえません」と説明しているのに、耳元で大声をあげる人、手話を使う人、難聴者が使う助聴器を耳元に持ってくる人、筆談する人など医療機関側の対応は様々であった。

加えて設備的な問題もある。ガン細胞摘出手術を受けるために20日間、入院した。医療施設は患者に一番優しいところなので、いろいろ便宜を図ってくれるだろうと期待していたが、医療施設ほど不便な施設はないと感じた。

まず、呼び出しが聞こえないのに、返事がないと後回しにされる。医療従事者の指示もわからないうえに、知りたいことも十分に教えてもらえない。普段の生活では携帯電話のメールを使用しているが、他の精密機器に影響を与えてはいけないということで、医療施設内では使えない。そのため、急な連絡もできない。そうした中で楽しみはテレビだが、院内のテレビには字幕がついておらず、楽しみも半減してしまう。

ある調査によると、聴覚障害者が不便を感じている施設のワースト1が医療機関だ。直接、命に関わるだけにインフォームド・コンセントは患者の視点から治療を含めた物事を考えていくが、聴覚障害者のことまで真剣に考えている医療機関はそれほど多くない。聴覚障害者には、立派な医療機関でもまさに「格子なき監獄」だ。医療機関で働く人々は「聞こえることが当たり前」という

発想の下に物事を進めている。こういう発想は一刻も早く改善してもらいたいと思う。

聴覚障害者は基本的に、音およびコミュニケーションに悩んでいるため、光、文字などで知らせることが大切だ。コミュニケーションは簡易筆談器などを使い、テレビは字幕番組が見られるデジタルテレビ、館内放送やナースコールを通してのやり取りは、LED付き電光文字表示機を活用すればよい。これは聴覚障害者だけではなく、静かにしなければならないところでは、聞こえる人にとっても優しいはずである。これらの機器の導入は、患者の不便を解消するだけでなく、医療施設で働く人々の精神的な負担を軽減することにも役立つ。また、その医療機関が聴覚障害者の患者に優しいというイメージアップにもつながり、結果として経済的なプラスとなる。

最後になるが、どこの医療施設も財団法人医療機能評価機構から「認定病院」に指定されることに力を入れている。患者にとって、認定は安心して受診できる医療施設かどうかの判断につながるからだ。そのためか、認定における評価事項は無理をしても用意するが、そうでないものには投資したくないという雰囲気がある。こうした事情も、医療施設における聴覚障害者への配慮を遅らせている要因の1つになっているのではないだろうか。

医療施設はあらゆる患者がおりのままの姿で、安心、快適、かつ文化的に利用できる施設でなければならないはずだ。聴覚障害者にも公平に、平等に対応していただきたい。BF、UD化はみんなの問題でもあるが、自分の問題でもあるという意識を持って推進していただきたい。

(なかぞの ひでき)

【拝啓、病院の皆様—聴覚障害者が出会うバリアの解消を】(現代書館)他著書あり：〒164-0001 東京都中野区中野 3-33-3-5 F